



TIERRA DE NADIE

(Pre.)

©片足靴屋/Sheagh sidhe

TIERRA DE NADIE

I



南風野さきは

TIERRA DE NADIE/The first act ①

TIERRA DE NADIE

(TIERRA DE NADIE/The first act ①)

I

CONTENTS

Prologue/序章	7
Chapter1/第一章	14
Chapter2/第二章	70

THE CHARACTERS

シャグリウス・アクィレイア/シルザ大司教

ジョゼフ・キャンティロン/フィアナ騎士団所属騎士

ダリオ・ファルネーゼ/シャグリウスの従者

リラ・コトウス/カルヴィニア公爵の甥

サーレ・ニールセン/ジョゼフの従騎士

ベルトラン・ダン・マルティン/フィアナ騎士団団長

ラヴェンナ・ヴィットーリオ・エマヌエーレ/女帝

カトウルス・アクィレイア/アクィレイア公爵

ウォルセヌス・アクィレイア/デシェルト総督

ヨーヴィル・ファルフアッコ・クリオ/サディヤ侯爵

ベルナール・ド・テルム/ナッセレディーン侯爵

アルノー・アルマリック/帝国国教会枢機卿長

メルキオルレ・マデルノ/帝国宰相

フローレンス・キャンティロン/内務卿

ロバート・ベルナール/近衛軍長官

エセルバート・ガートナー/近衛軍帝都駐留部隊隊長

セルヴ・ノレーイア・トゥルス/アルウェルニー族

リーザ・クロンシュタット/薬師

オルトヴィーン・ヴァースナー/大傭兵

TIERRA DE NADIE

I

蒼の薄闇という夜の名残が世界を満たす夜明け前の数刻。肌が裂けるのではないかというほどに張り詰めた、吐息すら凍る、底冷えのする喉にざらつく大気。

「かつて、我々は誓った」

そこに響くのは、静かに、しかし確実に、玻璃の硬質さを有する大気を震わせる、低く落ち着いた壮年の男の声音。

「我々は帝国のためにこの身を捧げることがを誓った。帝国を護ることを、誓った。陛下をお護りすることとはすなわち帝国を護ることであるということを、帝国を護るということは陛下の臣民を庇護することであるということを、我々は知っている。ゆえに、我々はいかなることがあろうと、陛下の前に、その傍らに、後に、立つ。その御身のお傍に、常に、在る」

城塞を挟むように南北に聳え立つ峻巖たる岩山。雪を冠したそれらは淡い蒼を放ち、夜明け間近の空と同化する。

「我々は帝国のためにこの身を捧げることがを誓った。では、今はいかなる時か。陛下の坐すこの帝都が叛徒に囲まれ、陥落の淵にある今とは、いかなる時か」

吹き抜けるのは薄氷のごとき鋭さの冷ややかな風。はためき翻るは銀糸の煌く紅の旗。夜明けの薄い陽光に煌くその銀糸が描くのは、天秤と剣とが交差する、ヴァルーナ神教の標章にして帝国紋章。

「我々はこの帝国に相對するすべてのものに対峙する。すなわち、陛下に相對するものすべてに対峙する。我々は陛下の近衛。最も陛下の近くに控え、陛下の盾となるべき者」

峻巖たる山と山の間に住む七層から成る城塞都市——帝都テイエル。帝国国教ヴァルーナ神教ファウストウス派における最高位の聖人——聖パトリック生誕の地という伝承に彩られた白亜の都。

帝都を囲む城壁の外、東の城門の前。都市の内と外とを區別する城門の鉄扉は固く閉じられている。城門を背にして整然と並ぶのは、鈍い光沢を放つ鎧に身を固めた近衛兵。彼らの騎乗する馬の吐く白い息が、夜明け前の冷ややかな大氣に融けた。

「我々は誓う。この帝都を護り切るといふことを。我々是我々の責を果たすといふことを。我々是我々の誓いを守り切るといふことを」

城門の上で翻るのは銀糸と紅の近衛軍旗。地より天を目指す陽の光が滲みかけている夜の余韻の残る空を背にして風にはためく旗の下、整然と並び控える近衛兵の前、青毛の馬に騎乗し声を響かせ重厚な存在感を醸し出している壮年の男こそ、近衛軍帝都駐留部隊長——エセルバート・ガートナー。

ガートナーの髭の中の厚い唇が笑みのかたちを描く。

朝靄に霞む遠くの稜線はどことなく透きとおっていて、目を眇めてしまうほどの眩い太陽がその後ろにたゆたう。張り詰めた大気の中、再び訪れる日没までの時間だけ宵闇を駆逐する陽光がゆるやかに夜空を侵蝕し始める夜明け。薄れゆく宵闇と、あたたかなゆるやかさを取り戻しゆく静かに沈む大気。

不敵な笑みを浮かべながら、鋭さと穏やかさとが同居している泰然とした蒼の目で麾下の兵を見渡しながら、ガートナーは腰に佩いた鞘から片手でゆっくりと剣を引き抜いた。

「そして私は誓おう」

厳然と大気を震わせる、頼もしく聞く者の鼓膜を震わせる、腹に響く張りのあるその声。「我々はこの戦いにおける勝利への端緒を、この戦いの終結への端緒を、今この時をもつて切り拓くということをも！」

晴れ渡った蒼穹はどこまでも高く。ガートナーが高く掲げた幅広の剣に、城門の上ではためく紅の軍旗の紋章を象る銀糸に、夜明けの陽光がきらびやかに反射する。

その場所からは帝都の東に広がる平地が皮肉なほどによく見渡せた。

遠くに横たわる稜線と、その手前に布陣された叛徒たる諸侯の連合軍と。

そして、叛逆の矛先を向けられているはずの当の本人は、紅を刷いたその小振りな唇にゆるい弧を描かせる。

帝都第七層——帝都で最も高いところに位置し、かつ、総てを見渡せる、白亜の城の精緻な装飾が施された棧敷。そこに置かれた長椅子に、硬質な短い緑髪を吹き抜ける風に好きなように遊ばせながら、漆黒の衣を纏った小柄な若い女が腰掛けていた。その背後に控えるのはふたりの男。真つ白な短髪と真つ白な長い眉毛の、穏やかな面持ちの初老の男——帝国宰相メルキオルレ・マデルノ。そして、白いものが混ざり始めた髪をゆるくひとつに束ねている、尖った顎と細い目を持つ、黒衣に身を包んだ壮年の痩せた男——帝国国教会枢機卿長アルノー・アルマリック。

つくりの甘さを裏切つて酷薄なまでの鋭さを感じさせる長い睫毛に縁取られた女の蒼の目が、帝都の東から西に転じられる。脚を組んで優雅に長椅子に座る女の肩には一羽の白い鳩が留まっていた。

脛を落とす、女は唇を持ち上げる。

「夜が明けるわ」

響いたのは、まろやかで透明な、あたたかでも冷ややかでもない、耳にした者にはどことなく近寄りがたさを覚えさせるような澄んだ声音。

細い指に鳩を留まらせ、女はゆるゆるとその脛を持ち上げた。

「ついに動き出しますか」

宰相のこの言葉に、

「それはどうかしらね」

悪戯っぽく微笑しながら女は立ち上がる。

帝都の東、夜明けの鮮烈な陽光の下。帝都を囲む諸侯連合軍の陣形が、乱れた。

「流石はウォルセヌス・アクイレイア」

女の唇から感嘆の吐息が零れ落ちる。

稜線の彼方より現れた一軍が連合軍の後背を叩く。それに呼応するように帝都側から近衛軍が——高地から低地へと——一点に集中して正面から連合軍にぶつかり、その勢いのまま連合軍を分断、連合軍の背を叩いた一軍と合流。連合軍と接している兵は白兵戦を、接していない兵は左右に展開。ガートナーの指揮により近衛軍の一隊が動き出すと同時に城門が開き、彼らの拓いた血路に城壁の内側にて城門前に待機していたガートナー指揮の部隊とは別の部隊が雪崩れこむ。そして、同じく城門内に待機していた市民軍が城壁に沿うように広がった。

「そして、オルトヴィーン・ヴァースナー」

立ち上がった女は棧敷の淵に歩み寄り、その指先に鳩を留まらせたまま、眼下で展開される光景をただ静かに見つめる。

シュタウフェン帝国第五三代皇帝ラヴェンナ。黒以外の色彩をその身に纏うことが珍しいことに由来する異名は漆黒の女帝。

す、と、女帝の細い腕が持ち上げられた。その繊手に留まっている鳩がその場で数回羽ばたく。

そして。

「確かに事態は動き出したわ、マデルノ卿」

その指先から飛び立ち、蒼穹に吸いこまれてゆく鳩の白を女帝は目で追う。

「だけど、膠着状態に一石を投じて動きを生じさせたからといって、必ずしも事態が解決するとは限らない」

肩越しに背後を振り返り、女帝はからかうような声音で言葉を紡ぐ。

ほんの少しだけ、可愛らしく小首を傾げながら。

「ねえマデルノ卿。貴方、思いあたる節は、ない？」



南北を峻巖たる岩山に挟まれ、東西に広大な平地が広がる、シュタウフェン帝国帝都テイエル。皇帝の居城が置かれているこの帝都が反皇帝を掲げる諸侯連合軍——自らの正統

性を主張するためか、彼らは自らを帝国初代皇帝の名を冠しアウグスト同盟と名づけた――に包囲されたのは、ファウストウス暦四二二年初秋のこと。その約半年後にあたるフェブルアリウスの月の第一五日、約半年に亘る籠城の末もはや陥落間近と目されていたこの都市は、周辺諸国の予想を裏切って息を吹き返す。



TIERRA DE NADIE I

著(描) : 南風野さきは

発行 : 片足靴屋/Sheagh sidhe

初出 : 片足靴屋/Leith bhrogan

URL : <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

(2009.10.11 現在、第二幕第三章展開中)

印刷所 : コミックモール(文伸印刷株式会社内)

※著作権は著者に帰属いたします。

※この物語はフィクションあり、実在の人物・団体・事件等には一切関係ありません。

*お手に取ってくださった皆様、お世話になりました皆様、印刷所さま、本当にありがとうございました。

TIERRA DE NADIE(Pre.)

<http://p.booklog.jp/book/37168>

著者：片足靴屋/Sheagh sidhe

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/leithbhrogan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/37168>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/37168>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.